譜本としての『平家正節』
― 口伝とその視覚化 ―

鈴木孝庸

1

本日は、平曲譜本の中でも特に『平家正節』について話しをせよとのことですが、今年の春にＤＶＤ版として刊行された尾﨑家本の『平家正節』の解説を担当しました時に気が付いて書きましたことを、もう一度ここで話してみようと思います。

気が付いたことは、尾﨑家本正節は全部で39冊ですが、外形から見て他の冊と違う冊が二冊あり、この二冊の中味を見ますと、他の37冊とは筆跡があきらかに異なる字で書いてあり、さらには、墨譜（はかせ）の記し方が他の37冊と違った点がある、ということです。㊟

問題は、墨譜の記し方の違いなのですが、誤解のないように申しておけば、墨譜の記し方が違うと言っても、そのことで〈語り〉〈平曲〉の表現が違ってくるのではありません。平曲は、琵琶を伴奏楽器とする、というか琵琶の音を拠り所としながら口で表現されるもの、ということができると思いますが、そのような〈平曲〉〈語り〉の、発声される

表現は変わらないものの、その〈声・表現〉が、譜本として楽譜として表記される場合に、ちょっとした、あるいは大きな、違いがあるのだということです。

どのように墨譜の記し方の違いがあるのかについては、二つ指摘できるのですが、

・一つは〈ハリ〉ハの記し方、

・もう一つは〈小節〉の記し方

です。当初の計画では、いずれも取り上げて検討結果を報告する予定でしたが、準備が間に合いませんでしたので、〈小節〉のことだけを取り上げます。

2

さて〈小節〉は、独特の役割を持っています。すなわち、平曲演奏家・語り手は、平家の物語りを語り進める時に、『平家物語』のことばを、文意を尊重しながら、適宜ことばを区切って発声していくのですが、〈小節〉は、『平家物語』のことばの小さな単位の、文節単位と言いますか、単語次元ではありません、物語伝達の意味表現を損なわない範囲での一区切りの末尾の二音字ないし一音字に関わる技法です。と言うと、かえってわかりにくい説明になってしまったのかもしれませんが、分かりやすく具体例で言いますと、

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり　……

と発声する時には、「祇園精舎の鐘の声」をひとまとまりと見て、「…鐘の声」の「こえ」のところ（二音字）に〈小節〉

があります。さらに「諸行無常の響きあり」の「あり」のところにも〈小節〉があります。という具合です。この程度の説明で御理解いただけるかどうかわかりませんが、先に進みたいと思います。

3

さて、このような〈小節〉は、平曲の曲節で言えば、〈中音〉〈三重〉〈拾〉〈折声〉などに出てきます。〈小節〉の出てくるのは、平家の物語の「ことば」次元で言えば、ことばの小さなまとまりのしっぽの二音字ですが、音楽的には、平家音楽の中心音（琵琶の第三絃第四柱の音）ないし中心音から逆六（完全四度下）の位置にある基盤の音（琵琶の第二絃第三柱の音）に回帰し、〈語り〉の基本音を確認する働きがある、と言ってよいと思います。

以上のように見て来ますと、〈小節〉は、『平家物語』のことばにある区切り・まとまりを与え、音楽的には基本を確認するというわけですから、「文学的にも」「音楽的にも」重要な役割をもった発声箇所・発声技法だということができると思います。

4

さて、このような意味をもった〈小節〉は、〈中音〉では〈一ノ声〉〈二ノ声〉〈中ユリ〉、〈三重〉では〈一ノ声〉、〈拾〉では〈一ノ声〉〈突据〉、〈折声〉では〈引下〉〈引捨〉です。これらの〈小節〉が、譜本の中でどのようにあらわされているのか。このことを尾崎家本正節をみていて気が付いたのですが、尾崎家本では、先程言いました大勢を占め

る37冊では、墨譜の形だけになっています。〈中音〉の〈一ノ声〉ならば、「リ」という記号に「ー」という横一本棒です。これが、筆跡のあきらかに違う方の二冊では、墨譜・符号の形（リー、リつ）がきちんと記されながら、そのわきに「一ノ声」だとか「二ノ声」だとかが、文字で、ことばで、記されているのです。

もっとも、このような墨譜の記し方を、私は尾﨑家本で初めて見たのではありません。私は、橋本敏江先生のお教えをいただいて、平曲のお稽古を続けておりますが、そのお稽古の時に使う譜本は、館山家御所蔵の『平家正節』で、その中には、時々、「一ノ声」「二ノ声」などが墨譜のわきに記されているものを見ることがありました。しかし、その時は、特別そのことを意識してみる気持はありませんでした。なにしろいかに声を出すか、音・音程を間違えないようにということで精一杯だったのですから。また、『平家正節』以外の平曲譜本を見ておりますと、例えば、波多野流譜本でも、正節の〈小節〉に対応する箇所には、「一ノコヘ」「二ノコヘ」などと文字で記しているだけであることも、知っていましたが、これも、これまでそのことに注意してみようという気にはならなかったのです。

しかし、これは「音」を「視覚的に表現」する時に、ふたつの方法があり、尾﨑家本の二冊は、ふたつが合体した形になっているのではないか、そしてもしかしたら、「小節」に関しては、もともとは「文字・ことば」で指示するのが基本的な在り方だったものが、後に「墨譜の組み合わせ」で指示するように変わったのではなかったかと想像したのです。

5

右の想像を検証するために、DVD解説では、他の譜本の譜記を調べてみました。それらは、

・別に尾﨑家に所蔵されている一句仕立ての譜本（「嚴嶋御幸」「女院御出家」）

・鈴木孝庸蔵『平曲中音集』

・波多野流譜本
・『秦音曲鈔』
・昭和女子大本
・豊川本

ですが、「文字・ことば」から「墨譜」へという流れが考えられると思います。

本日再説の機会が与えられましたので、あらためて、しかも『平家正節』に比較的近いと考えられる譜本の指示（または墨譜）を対照してみたのが、次の表です。空欄は、指示ないし墨譜が特定できなかったものです。光丘文庫本は、これまで紹介・検討されたことのない譜本ですから、うしろに現在分かっていることを記しておきました。

	吟譜	光丘文庫本	豊川本	也有・平語	平家正節	波多野流
中音（いちのこえ）		一声	一ノ丶			一ノコヘ
（にのこえ）		二声	二ノ丶引			二ノコヘ
（ちゅうゆり）		中ユリ			中ユリ	（中ユリ？）
三重（いちのこえ）						一ノコヘ
拾（いちのこえ）		一声	一ノ丶			一ノコヘ
折声（ひきさげ）		引下	引節引			
（ひきすて）		引捨	引節落			引

『平家吟譜』と『平家正節』は、「墨譜」で「小節」を指示し、光丘文庫『平家曲集』と波多野流譜本は、「文字・ことば」で「小節」を指示し、豊川本や也有筆『平語』は、折衷型となっています。

あらためてこの状態を見直すと、当初想像したように「文字・ことば」から「墨譜」へと「時間的に変化」したのだろうことは、大筋で認めてよいと考えられます。しかし、よくよく考え直しますと、各譜本がひとつの空間で順を追って成立してきたのではありません。豊川本は江戸のものであり、也有本は名古屋のものだと考えられるからです。そうなると、こうした諸「譜記」の在り方は、全譜本をひとつの「時間軸」で考えるのではなく、他に要因を想定しなければならないのではないでしょうか。

しかも、「文字・ことば」式は、全体として見て「墨譜」が考案される前の段階だというのなら話は別ですが、光丘文庫本にしても波多野流譜本にしても、それぞれの譜本中の他の箇所では頻繁に「墨譜」が使われているのです。

問題は、「小節（こぶし）」部分と「その他」部分（かなり乱暴な分け方ですが…）とで、演誦上、伝受上、大きな違いがあったのではないかということです。「小節」の意味については［3］で触れました。「小節」は、文学的にも音楽的にも重要な意味を持っていると考えられますから、その箇所の演誦表現には、楽譜としてすべてを表すことが出来なかったのではないでしょうか。たとえば、現在伝わっている「小節」の表現には、発声と琵琶演奏（それぞれの「小節」で決まった「手」があります）を同時に行うことになっているのですが、そのことは、譜本の中には書いてありません。「口伝」の世界なのです。「小節」部分と「その他」部分とで、大きな違いがあるとすれば、

・「その他」部分は、アクセント・節回し等を変更する余地がある、のに対し、

・「小節」部分は、固定的であるが、すべてを視覚的に把握できるようには表示できない、

ということでしょう。「小節」を墨譜にせず、「一ノ声」とか「二ノ声」などとことばで指示しているのは、その指示ではすべてを伝えることができないことが分かっていて、しかし、逆にそのことばが、「口伝」にすべて託すような形で、「小節」部分の演誦の総体を表すことができたからだと考えるのです。

私は、各譜本の譜記をひとつの時間軸で見て、古い段階では「文字・ことば」で指示するしか方法のなかった「小節」を、後出で完成形ともいうべき『平家正節』は、進んで視覚化を計ったのだと評価したのですが、前掲のように諸譜本を見

直してみますと、「晴眼者のための譜本」ということを無批判に受け入れ、そして、単一の時間軸で考えていたのだと、反省しなければならないのではないかと思いました。

平家のものがたりの「音」を視覚的に表現したものが譜本だと考えるなら、「視覚化されないもの」が同居するのは、「音」の伝受に「視覚」を必要としない者の存在を考え併せる必要があるのではないか、と思います。譜本の問題は、晴眼者のために作成されたのだと、これまで考えられて疑われることがなかったのですが、盲人にとっても、演誦の伝受に関わって譜本が必要だったのではないかと、尾崎家本『平家正節』の譜記を見ることから、考え始めたのです。なお、この想像を支えるものとして、京都、奥村検校の所有文書中に波多野流譜本の一揃いをはじめ、『平家正節』の数句が含まれていることを付言しておきます。

㊟ 尾崎家本39冊の内、「七之下」「八之下」の2冊に注目したのだが、ほかに「間の物」と「小秘事」の2冊もあきらかに筆跡が異なる。しかし、こちらは「〆」の連続譜記はなく、「小節」部分に文字付記はない。筆の違いに注目すれば、35、2、2、と分けなくてはならないが、「譜記」の在り方を注意するのが本稿の主眼であるから、37と2で話を進める。

◎付記　酒田市立光丘文庫蔵『平家曲集』

この譜本については、〈酒田市立〉図書館報〔光丘〕No.140（平成二十四年二月）に紹介文を寄稿した。また「新潟大学国語国文学会誌」第五十四号（平成二十四年三月予定）にさらに詳細な検討を載せる予定。

一句1冊仮綴本。百七十九句、182冊存。

第一巻―十四句、14冊存。「祇園精舎」ナシ。

第二巻―十五句、15冊存。「善光寺炎上」ナシ。

第三巻―全十八句、18冊存。

第四巻―全十六句、16冊存。

第五巻―十六句、17冊存。うち「月見」二冊存。「延喜聖代」「東国下向」ナシ。
第六巻―十二句、13冊存。「小督」は上下二冊。「葵前」ナシ。
第七巻―全十九句、19冊存。
第八巻―全十二句、12冊存。
第九巻―十八句、19冊存。「小宰相」は上下二冊。「濱軍」「落足」ナシ。
第十巻―十五句、15冊存。「横笛」ナシ。
第十一巻―十五句、15冊存。「勝浦合戦」「那須与市」「鶏合」ナシ。
第十二巻―九句、9冊存。「紺掻」ナシ。
灌頂五句―ナシ。
大小秘事―ナシ。

(1) 墨譜の形、白声の終結部に「ムン」と指示することから判断して、
・旧東京教育大学（現筑波大学）蔵古写本『平家物語』巻第一の譜記
・東北大学図書館『平家物語かたり本』
と同じ系統の譜本と考えられる。

(2) 右の二譜本に関して、
薦田治子『平家の音楽』（二〇〇三。第一書房）170頁～
奥村和子「前田流平曲古譜本における白声の存在について」（「女子大文学」50）
の検討がある。
・筑波大学本に関して、渥美かをるの指摘―ⓐ白声がないこと。ⓑよって前田・波多野両流分岐以前の古譜本で

あろう。―があった。

・現在では、このうち、ⓑの可能性は少ないと指摘されている、しかし、ⓐに関する解釈は十分ではなかったと思う。

(3) 今回、光丘文庫本を検討する中で、あらためて筑波大学本を見直したところ、「白声」の指示がないことは確かだが、東北大学本や光丘文庫本で「白声（詢）」などと指示したあとの白声の「尾部」を意味する（薦田）「ムン」が、筑波大学本にも記されていることを確認した。―筑波大学本も、「白声（詢）」などと表示する譜本をもとにした写しであることを示すものと判断される。

(4) 光丘文庫本には、いくつかの注目すべき書き込みがある。

この中でも、「豊田」と記す書き込みを紹介しておきたい。第二巻の「西光被斬」「小教訓」「少将乞請」という連続する三句中にある。

i 豊田ハ指ツトフ（「弓箭ヲ帯シテ、馳會（ツドフ）。」の「馳ツドフ」に対する書き込み）―「西光被斬」

ii 豊田コハ（「抑何（ソモ）事ナルラン」の「ソモ」に対して）―「西光被斬」

iii 豊田兵トモ（「内ニモ侍トモ」の「侍トモ」に対して）―「西光被斬」

iv 豊田イソキ（「ナシト宣ヘバ。縁ノ上ヘ」を「宣ヘバ。イソキ縁ノ」とのこと）―「西光被斬」

v 豊田皆ト教ユ（「京童部ハ高平（カ）太トコソ」を「皆高平太ト」とのこと）―「西光被斬」

vi 豊田出サレタリシ（「搦出シタリシ」に対して）―「西光被斬」

vii 豊田シヤツト教（「奴（キヤツ）ガ首」に対して）―「西光被斬」

viii 豊田去（サリ）ニテモ（「尓トテハ」に対して）―「小教訓」

ix 豊田ハ御所ト教ル（「御前（ノ）ヲ。退出ラレケル」に対して）―「少将乞請」

このうち、v vii ix の書き込みを見ると、これらは直に教えを受けた者の書き込みと考えることが出来るであろう。

教えの主は「豊田」としか記されていないが、平曲演奏家で「豊田」と言えば、「豊田雅一検校」が想起される。『平家吟譜』制定の基礎となった平曲吟味会の指導者でもある。そうすれば、光丘文庫本は、『平家吟譜』に近い時点での成立、または、『平家吟譜』の周辺の伝承を記したものと考えられる。

(5) 念のため、右のi～ixについて、『吟譜』（この三句は、宮崎文庫記念館蔵平家物語のみ収載）と照合した。その結果は、「豊田」とはすべて一致しなかった。この結果は、まことに残念だが、「豊田検校」以外に想起すべき「豊田」は、現在考えられないので、まずは「豊田検校」と見て、『吟譜』との精査を、今後に期したい。

(6) 光丘文庫本等三譜本は、『吟譜』に近い譜本、さらには『正節』に近い譜本と見てもよさそうだ、ということである。

(7) さらに、光丘文庫本は、三譜本の中では収録句数が最も多い。灌頂五句や大小秘事のないのは惜しいが、三譜本の中心にすべき譜本と考えられる。

※参考文献…『酒田市立光丘文庫所藏國書分類目録』（一九八八）。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録」。

（新潟大学人文学部教授）